98　誌上発表

『鍼法秘粹』について

岩田源太郎
日本鍼灸研究会

『国書総目録』に引かれた『元禄十一年書籍目録』所載の『鍼法秘粋』3巻の存否は未詳であるが，その転写本とみられる一本が伝存する．この写本は鍼灸師・井上恵理の旧蔵書で，奥書に「昭和十六年秋……門弟本間祥白氏の妻女の写本せるもの．原本は大阪市保宝弥一郎先生より借用せるもの」とある．『臨床実践鍼灸流儀書集成』第4冊所収本はこの転写本によるが，奥付と奥書は影印から除かれている．本書は，江戸前期までの日本近世鍼灸の研究に重要と考えられるので，以下，この転写本によりその内容を検討する．

『鍼法秘粹』は，元禄5（1692）年の序を附して同年刊行されている．著者については，序文末に「花洛隠士・和田氏」とある以外，一切の記述がないが，『国書総目録』ではこれを「和田養庵」とする．序文には，世の鍼法家伝の書があるが用いるには足らないので，和田氏に伝わる大明一流の鍼法と輸穴105穴を併せて初学者向けに編纂したとある．また跋文には，和田氏が学んだ大明一流は，雲州の匹地喜庵と馬木理安，石州の見龍翁から奥義を授かったとある．

『鍼法秘粹』は上中下3巻全47章からなる．上巻前半は臨床総論で，天地人之事，四季之鍼之事など6章，後半は臨床各論で，病證別に鍼法が6章にわたり述べられている．中巻では，上巻後半に続き，鍼法が21章にわたり述べられている．鍼法の記載の特長は，選穴，補瀉等の諸注意が述べられ，病門1章毎に仰人図に主治穴を示していることにある．また，現行の穴名とは異なる，流派独自の穴名が並んでいる．また下巻の大明一流の穴名の章には未記載の穴（主に背部の兪穴）も散見することから，『鍼法秘粹』における主治穴の全体像を窺うことができる．下巻は，「口伝之事ヲ記」と添え書きがあり，臨床上の諸注意，鍼灸の禁忌，鍼の補瀉，臓腑の形状，大明一流の穴名などが13章にわたって述べられている．このうち鍼の補瀉については，「八道之補瀉之事」と題して，8種類の鍼の補瀉の方法が書かれている．臓腑の形状では，『難経』四十二難に見える臓腑の重さや形状などが引用されている．大明一流の穴名では，現行の穴名に加えて，流派独自の穴名が見られる．ただここに載せられている穴名は全部で89穴だけで，取穴法も書かれていない．

和田氏の師事したとされる匹地喜庵は，明人の琢周に師事して鍼術を修めたとされる匹地流の開祖・匹地喜庵と姓名が同じである．匹地流の鍼灸術は，喜庵の孫・福田道折が刊行した『大明琢周鍼法一軸』とその和語抄である『大明琢周鍼法抄』（1679）によりうかがうことができる．これら匹地流の鍼灸書と，『鍼法秘粹』を比較すると，流派独自の穴名やその表現が一致し，匹地流の影響が強く感じられる．治療穴数も，匹地流が104穴で大明一流が105穴とほぼ同数である．また，鍼の補瀉法について，匹地流では5種類を挙げるが，それは大明一流で挙げられている8種類のうちの5種類と同内容である．なお『鍼法秘粹』の穴名の表記方法や流派独特の穴名の一部，下巻所載の臓腑の形状などには，『鍼灸聚英』の影響も感じられるが，匹地流自体も『鍼灸聚英』の大きな影響下にあった．

以上の事から，大明一流の書である『鍼法秘粹』は，日本近世初期の鍼灸流派である匹地流の影響，及び近世日本鍼灸の形成に寄与した『鍼灸聚英』の影響の下に成立した鍼灸書と考えられる．